王侯貴族が劇場を支える構造が崩壊して以降、近代オペラの歴史とは、興行と芸術のせめぎ合いだった。興行側だけを非難するわけにもいかぬ。気まぐれな客から木戸銭を取る方策に頭を絞る有能な興行主がなければ、現在も名作として上演されるオペラ作品の多くが、作曲家の構想リストに挙がる草案か、良くても幻の大作となっていた筈である。

「フィデリオ」は「レオノーレ」の改訂版である。オペラの直接の子孫たる現代のハリウッド娯楽映画に喩えれば、両者の関係は「劇場公開版」と「特別ノーカット・オリジナル版DVD」のようなもの。無論、完全な原典版など、作曲家亡き今は再現不可能だ。今回の上演も「オリジナルエディション～05年アルミンク上演版」である。さて結果やいかに。

ベートーヴェン
歌劇「レオノーレ」（1806 年改訂版）

楽聖ベートーヴェン（1770-1827）にも不得意ジャンルはあった。劇場音楽である。世界の劇場で基本レパートリーとして上演されるこの作曲家の舞台作品は、作者の意に反し「フィデリオ」と通称されるジングシュピールのみ。独立したナンバーを台詞とメロドラマ（伴奏音楽付き台詞）で繋ぐドイツ民衆歌芝居の様式で書かれた、19 世紀初頭に流行ったスリルとサスペンスの救出劇である。劇的構成に難あるものの、演劇的展開を喪失しカンタータとなってしまう終幕や、己を犠牲にする夫婦愛など、第９交響曲の前触れともみなせるベートーヴェンらしい力作なことは確か。

本日が日本初演となる「レオノーレ」とは、歌劇「フィデリオ」のオリジナル稿である。上演は稀でも「レオノーレ」発掘の歴史は古い。なにしろ若き異才が傑作の森の入口の２年を費やした楽譜なのだ。初演から翌年の再演までの改訂のプロセスや、決定稿「フィデリオ」に至る道筋の探索は、学者ならば天才の創作の秘密を解き明かす格好の材料に思って当然。実際、作者が没した直後からこの歌劇は人気の研究テーマで、現在では作曲から上演の経緯や社会経済状況など、かなり詳細に判明している（「レオノーレ」初演後 100 年にベルリン宮廷歌劇場リヒャルト・シュトラウス指揮で復元再演がされたほど）。歌劇内容を説明するのが目的の当稿では詳細は割愛。関心の向きは、ゴールドシュミットの原典研究論文などが収めた『名作オペラブックス３：フィデリオ』（音楽之友社）を参照。

◆作曲及び改訂経緯

生まれ育ったボンから帝都ヴィーンに移った 22 歳のベートーヴェンは、作曲及びピアノ名人として古典派の基本を吸収する。世紀末から翌世紀初頭、ナポレオン軍の攻撃に晒された帝都は、1905 年 11 月、ついに占領された。城壁の直ぐ外のアン・デア・ヴォーン劇場で３幕の歌劇「レオノーレまたは夫婦の愛」が初演された 11 月 20 日は、フランス軍占領７日目である。

作曲家を支持したパトロン貴族はみな帝都から逃亡、庶民は家を出ない。結果として、独語台詞の音楽劇の聴衆は仏軍人ばかり。いくら原作がフランスで人気のブイーの救出劇であれ、気晴らしを求める仏将校の全てが筋書きを知るはずない。米軍侵攻直後のバグダッドで、フセインの検閲に配慮した台本のまま米軍将校を前にアラビア語劇を初演したみたいなもの。いくら自由を求める内容だろうが、成功の可能性は皆無だろう。

３回の上演で引っ込められた初稿を前に、ベートーヴェンは改定に着手する。宮廷歌劇場支配人ゾンライトナーの３幕台本を、友人の作家ブロイニングが２幕に圧縮。占領軍が撤退し秩序が戻った４ヶ月後の 1806 年３月 29 日に初演と同じ劇場で改訂再演される。「レオノーレ」序曲第３番で始まるこの２幕版は成功するも、劇場支配人とベートーヴェンが衝突。上演は２回で終了。本日演奏される譜面は、この「レオノーレ」改訂決定稿である。

以降、ベートーヴェンは「運命」や「田園」など純粋器楽に没入。フランス軍の再度の占領を経た 1814 年５月、初演時にアン・デア・ヴィーン劇場舞台監督だったトライチュケが台本を再改訂、音楽も徹底的に手を入れた通称「フィデリオ」がケルントナートール宮廷劇場で初演。今に伝わる最終稿となる。ヴィーン会議が始まる数ヶ月前のことだった。

◆粗筋

本日は台詞を極力排除するそうなので、まずは物語展開を記しておく。刑務所長ピツァロの不正を暴こうとした正義の政治家フロレスタンは行方不明となった。舞台はスペインの国立刑務所の庭。妻レオノーレは男装、フィデリオと名乗り牢番ロッコの助手に雇われ、牢獄に収監されたらしい夫を捜している。牢番の娘マルツェリーネは、真面目なフィデリオに心を寄せている。昔からの付き合いの門番ヤキーノが娘に心変わりを責めていると、牢番ロッコ、続いてレオノーレが登場。秘めたる思いを歌い合う。

衛兵を引き連れてピツァロ登場、大臣の牢獄抜き打ち査察の情報を得たピツァロは、地下の独房に不法に監禁した政敵フロレスタンの殺害を決意。衛兵にセヴィリアからの馬車が見えたら警報ラッパを鳴らすように命令、牢番には証拠隠滅のための墓堀を命ずる。ひとりでは無理だが秘匿を要する地下牢での緊急作業に、ロッコは娘婿にするつもりのフィデリオを手伝わせようと決意。一方、レオノーレは、結婚する気のマルツェリーナに話を合わせながらも、夫を思う信条を歌い上げる。

定時の囚人野外活動を短く切り上げ地下に向かうロッコのところへ、不正隠滅を焦るピツァロが再登場。全ての行為が保身であることを隠しつつ、ロッコを急がせ、衛兵らに警備を固めさせるのだった。（以上第１幕）

地下の独房。２年間幽閉され、最近は食事を減らされ餓死も近いフロレスタンが、妻への愛を朗唱。ロッコと助手が登場、男の墓を掘る。囚人を夫と察したレオノーレは、身を隠したままワインとパンを与える。

墓堀が完了。地下牢に降りたピツァロが短剣で政敵を刺し殺そうとした瞬間、レオノーレが間に入り、隠し持った拳銃をピツァロに突きつける。そのとき、大臣の到着を告げる衛兵のラッパが響く。絶望し地上に向かうピツァロ。ロッコはレオノーレからピストルを取り上げてしまう。緊張から失神したレオノーレは、夫に抱かれ息を吹き返し、再会を喜ぶ。が、地上からは復讐を叫ぶ合唱。救出は失敗したと夫婦は覚悟を決めるが、なんと復讐の声は不正政治家を糾弾するものだった。フロレスタンの友人の大臣フェルナンドは、失踪した友人を発見し喜び、悪人を排除。マルツェリーナは自分の誤解を知り、人々はレオノーレの勇気を讃える。（以上第２幕）

◆「レオノーレ」と「フィデリオ」の違い

「フィデリオ」に比べると、「レオノーレ」はドイツ歌芝居の因習が色濃い。例えば第１幕のフィデリオとマルツェリーネの教訓的二重唱は「魔笛」のタミーノとパミーナのようだし、マルツェリーネとヤッキーノのやり取りは同じくパパゲーノとパパゲーナのそれ

思わせる。「コシ・ファン・トゥッテ」風の人物取り違え宮廷喜劇としての色合いも残る。尤も、初演版がまるまる１幕を用いたジングシュピール風マルツェリーナの恋物語は、彼女とすれば思いもよらぬ種明かしで尻切れトンボになるのだけど。

「レオノーレ」が「フィデリオ」より優れるのは、大円団に向かう演劇的推移だろう。ロッコがレオノーレからピストルを奪い、レオノーレは夫の救出に失敗したと絶望し気絶。地上の合唱をピツァロ配下の衛兵の雄叫びと思わせ、サスペンスをもうひと山増やしている。到着ラッパ以降、夫婦が勝利者となりいつのまにか場面が地上に移る「フィデリオ」よりも遙かに自然だ。しばしば「フィデリオ」が晒される「結尾は演劇性ゼロの祝典カンタータ」という非難も成り立ち難い。

「フィデリオ」の歌劇としての異形さをベートーヴェン的と思うか。それとも、「レオノーレ」こそベートーヴェンが求めたフランス革命時代のジングシュピールだったと膝を打つか。判断は本日の終演後にどうぞ。

※

《第１幕》

序曲「レオノーレ」第３番：改訂上演時に書かれた巨大で充実した新作。殆ど劇内容を要約した交響詩で、作者もそれを意識していた。

第 1 番：フィデリオへの愛を歌うマルツェリーナのアリア。「フィデリオ」では次のナンバーとの順番が入れ替わる。

第２番：マルツェリーナの心変わりをヤッキーノが責める喜劇的二重唱。

第 10 番：ロッコ、マツェリーネ、ヤッキーノが言い合うブッファ風三重唱。初演の３幕版ではこの位置にあったが、改訂版では新１幕後半に移された。今回の上演で、アルミンク監督は初演版の位置に戻している。「フィデリオ」では完全に削除されたナンバー。

第３番：レオノーレが加わり、四声部のカノンに各々の気持ちを歌う傑作。なお、初演版と「フィデリオ」ではこの後にロッコが金の大事さを語る滑稽な独唱が置かれ、牢番の性格を際立たせるが、この再演版でのみカット。

第４番：地下牢にいるという特別囚の仕事を望むレオノーレ、難行への志願を誉めるロッコ、愛ゆえの勇気と喜ぶマルツェリーネの、長大で劇的な三重唱。ここまでが牢番の家が舞台の初演版では、第１幕フィナーレだった。

第５番：刑務所の庭。衛兵を伴ってピツァロが登場する行進曲。２幕に改訂した再演時に加えられ、場面転換の音楽も兼ねる。

第６番：悪行発覚の危機を察したピツァロの復讐のアリア。衛兵合唱が上司の顔色を覗う。

第７番：ピツァロとロッコの二重唱。ピツァロは地下の囚人を殺すよう言う。人殺しは嫌とロッコが断ると、悪代官は自分が手を下すからともかく大急ぎで墓を掘れと命令。

第９番：独奏ヴァイオリンとチェロを伴う、マルツェリーネとフィデリオの可愛い二重唱。良き夫婦とは何かを教訓的に説き、正に「魔笛」の世界だ。重厚な「フィデリオ」には異質でカットも当然だが、極めて魅力的な音楽。

第８番：レオノーレが夫救出の決意を語るレシタティーヴォとアリア。ホルンがノンビリ伴奏しソプラノが技巧を聴かせる前半は、貞淑な妻たる「フィガロの結婚」の公爵夫人も連想させる。が、テンポが上がる後半は「フィデリオ」の烈女だ。本日の演奏での８番と９番の入れ替えは、初演版に準じる。

第 11 番：４つの場面が続くフィナーレ。日課で戸外に出た囚人たちが、外気に触れる喜びを歌う。ロッコはさっさと囚人を牢に戻し、地下牢での墓堀を手伝わせるとフィデリオに伝える。マルツェリーネが駆け込み、ピツァロがまだ庭でグズグズしている牢番を叱りに来ると告げる。再び忠実な衛兵たちの合唱を従えて登場したピツァロは、衛兵に自分に忠実に働くよう朗誦。国王の勤めは忠実に果たすと応じる衛兵の合唱。「フィデリオ」とは合唱の役割がまるで異なるのに注意。

《第２幕》

第 12 番：牢に繋がれたフロレスタンのレシタティーヴォとアリア。冒頭は序曲にも用いられた印象的な旋律である。もっと長かったらしい初演版のアリアは失われた。

第 13 番：ロッコとフィデリオが地下牢で墓を掘るデュエット。フィデリオはこの特別な囚人について知りたがる。２人が地下に到着するシーンは初演版ではメロドラマだったが（消失)、この再演版では台詞のみとされた。「フィデリオ」ではウェーバー風メロドラマが復活しているのが興味深い。

第 14 番：この前の台詞部分で、レオノーレはこの囚人が自分の夫と察知。フロレスタンはロッコに、妻レオノーレに自分がここにいると伝えてくれるよう嘆願するが、ロッコは立場上受け入れられない。フィデリオは囚人を哀れむ風を装う。青年の心配りを感謝するフロレスタン、喜びと辛さが錯綜するレオノーレ、青年の優しさに感動するロッコの三重唱。フィデリオの姿で夫にパンを与えるレオノーレの音楽が際立って美しい。

第 15 番：全曲の劇的頂点となる四重唱。墓が掘られ、ピツァロがフロレスタンに己を名乗り、殺害を実行しようとする。レオノーレの名乗りの絶叫がピツァロの手を止めるも、殺すなら夫婦もろともと再び短剣を振り上げる。レオノーレは隠し持ったピストルを向ける。と、塔の上から響く大臣到着を告げるラッパ。ピツァロの悪行も、レオノーレの正当防衛の発砲も、ギリギリで阻止されたのだ。

第 16 番：ピストルをロッコに取り上げられ、絶望し気を失ったレオノーレを抱き起こすフロレスタン。地下に残された夫婦は、いかな状況であれ生きて再会できた喜びを歌う。

第 17 番：グランドフィナーレ。遠くで混声合唱が「復讐」と叫ぶ。自分らに対する罵声と思った夫婦は、最期を迎える決意を固める。が、復讐は卑劣な官吏ピツァロに対する衛兵や市民の怒りの声だった。フェルディナンドが登場人物全員を率い地下に登場。それぞれがそれぞれなりにレオノーレの勇気に感動する大アンサンブルに幕が閉じられる。「フィデリオ」終曲に比べると、オペラブッファのフィナーレの雰囲気がどこかに臭うかも。